

木工オーダー家具とリノベーションの自由で温かな関係 「slow furniture mode」

文/河合義徳

「自宅空間のプロデューサーになろうとする方をサポートするのが私達の役割。お客様の望まれる生活シーン、機能性、予算に合わせて、素材選びやデザイン提案をします」と依頼主とのコミュニケーションを大事にしている家具職人たち…。住まい手にとっては、「家具職人」は漠然と思い描き自分らしい家具を具体的に引き出してくれる強い味方。彼らのオリジナル家具や考え方に触れると、自分の求める暮らしのイメージを高めるうえで、「こういう生活スタイルもアリかも…」と、多くの事柄に気づかされる。波長が合えば「自分が大切にしている事、懂れている暮らし方、家の中で一番寛げる瞬間とは…」という漠然とした話を投げかけてみるのもいい。いつの間にか「それならこんな感じの家具を作るのは難しいですか?」「いやいや、作れますよ」という言葉のキャッチボールに変わってきたり…。あとは、予算に合わせた素材の提案、住まい手の機能性を重視したデザイン力、住まい手の嗜好性に合わせたテイスト仕上げ、耐久性への工夫など、彼らはアイディアの引き出しをたくさん持っているはず、家具職人の腕の見せどころだ。

オーダー家具が我が家に納められた時の充足感…それは、お気に入りの空間になった満足感、一生モノを手に入れた相対的経済性など、人それぞれ。満足に浸っている微笑ましい姿が想像できますね。家の中が、華やいだり、潤ったり…今までは感じられなかった自分らしい暮らしが始まるはず。

1. 細かなところまでスックリさせたデザインにもこだわって家具を作る松本貴哉さん(向巧舎・habiton.lab)「生活スタイルだけでなく、趣味や大切にしている事なども多く語ってほしい」と、お客様の話をじっくりと聞き出される。
2. 川上晃蔵さん(hunsabasara)は、少しずつ座面の高さが違うチェアを作り、「家具は生活を手助けするもの。家具に合わせるのではなく、生活や体に家具を合わせて作りたい。」と穏やかな語り口。
3. 銘木屋勤務経験から材木への想いと知識の深さがうかがえる徳田健二さん(上手工作所)は、木とスチールを組み合わせた家具がお得意。例えば、和家具の雰囲気になりがちな杉に、無機質な鉄素材と組み合わせることで、どこかノスタルジックなモダンスタイルに仕上げられている。
4. 婦木佑太さん(wood work olior)が制作したローソファ。「ソファに座っている人って案外少ない。ソファを背もたれにして、地べたに座る人が多く多いというのは…やはり日本人って地べたに座る習慣が馴染んでいるのか…視線が低いほうが安心するのかも…」という思いを形にした。この低い座面のソファ(一人用と二人用あり)は、展示会来場者からも「あぐらもかけるほど座面も広くてラクだし、この視線が何よりも落ち着く…」と年配来場者からも好評だった。
5. 近藤雄士さん(FURNITURE STUDIO COM)は「家具は飾る作品ではなく、生活道具。使い勝手にこだわりますが、最後はいつも木の素材感に助けられている。」と謙虚に語るが、彼の製作家具は同業職人から評価が高く、モノづくりのレベルの高さに刺激を受ける。ダイニングとリビング一体型のお部屋では、ベンチ式のダイニングチェアも生活スタイルに合わせやすいもの。
6. 遊び心も旺盛な西良顕行さん(HANARE)は、流木のありのままの姿を、そのまま椅子に一体化させる発想から、芸術性の高い作品を生み出すこともある。
7. 西良さんが製作したTATAMI bench-bedも、生活者目線。「チェアやテーブルは元々欧米もの。単にその真似事はせず、現代の日本人の生活にあったものを作りたい。」と和室が少なくなってきた最近の住宅でも違和感のないように優しいフォルムのベンチの座面に、畳メーカーとコラボした素材を施している。



セミナー「カジュアルリノベーション」

大規模な間取り変更を行うことだけがリノベーションではありません。自分らしい住まいづくりは誰もが憧れるものです。リノベーションの第一歩は、もっと身近なところから始められるのではないのでしょうか。私は約8年前に築25年超の中古マンションを購入しました。何気なく訪れたインテリアショップで見つけたアメリカ製デットストックの洗面台にゾクゾク惚れ込みました。その流れから米軍キャンプ払い下げの'70年代USEDキャビネット…さらに、世界観がどんどん広がり、かなり縦長のダイニング空間からひらめいた幅2m40cm×奥行き42cmという、一般的にはまず売られていないサイズの横長ダイニングテーブルをオーダー

します。そしてその空間を照らすのは、キャンプ用ランプのような照明。それを三点吊り下げたための照明レールの取り付け。ついには床材や壁へのこだわり…。2万円前後の洗面台がきっかけとなって、最終的には70~80万円程度にはなりましたが…納得できるお金の投げ方でした。なぜなら、ボートハウスのような空間に仕上げた先には、風通しの良い家族との楽しい暮らしがあったからです。また、何軒ものインテリアショップを訪れ、何人もの家具職人と話を重ねたことは、イメージを高めることが出来ただけでなく、既製品を固定概念にしていた自分を自由に解放してくれました。ちょっとしたこだわりがキッカケとなり、「既製品に

自分の暮らしを合わせるのではなく、自分の暮らしに合わせたモノを揃えてみたい」ということに気づく…その意識こそが、自分が「プロデューサー」になり得るリノベーションの第一歩です。部屋の一角から部屋全体へ、さらにはモノだけではなく、生活動線を含めた住まい空間全体へと、その可能性は多に広がります。まずは身の丈の範囲から肩の力を抜いて始めれば良いのです。つまり「カジュアル・リノベーション」のススメです。



河合義徳

関西のインテリア店舗の情報をwebで配信しているsu-mart(スマート)主宰。オーダー家具の魅力を伝える「slow furniture mode」を企画運営。「テマヒカカルを愉む」というコンセプトの元、関西の家具職人6名をwebで紹介しながら共同展示会も開く。<http://www.su-mart.jp/>